## Y4-25

# イタリア中部地震での心理社会的支援活動について

日本赤十字秋田看護大学　看護学部　看護学科[1)]、
秋田赤十字病院　診療センター[2)]、
伊達赤十字病院　精神科[3)]、
室蘭工業大学大学院　工業研究科　ひと文化領域/環境科学防災研究センター[4)]
○齋藤（さいとう）　和樹（かずき）[1,2)]、前田　潤[3,4)]

2009年4月6日早朝（午前3時30分頃）イタリア中部のアブルッツオ州でM6.3の地震が発生し、279名の死者、1,500名以上の負傷者、約46,000名の人が家を失うという被害を出した。この地震については、日本でも地震発生当日、即座に報道されたが、その後の報道は少なく、情報も少ない。イタリア政府は、海外からの救援を要請せず、イタリア赤十字社も他の赤十字機関に救援等に関して人的要請をせず独力で救援・復興活動にあたっている。

私たちは、イタリア赤十字社とラクイラ大学の協力を得て、研究者の立場で被災地ラクイラ市に行き、視察調査することができた。そこで主に心理社会的支援活動について調査したので、その一端を報告する。

1）イタリア赤十字社は、Protezione Civile（Civil Protection）と緊密な連携を取って心理社会的支援活動を行っていた。2）イタリア赤十字社では、心理社会的支援の独自のプログラムがあり、その研修を受けたボランティアと心理学や精神医学の専門家とがペアを組み二人ひと組で、避難キャンプを定期的に巡回していた。3）ドクター・クラウンというピエロのような存在の訓練を受けたボランティアが、避難所を巡回し心理社会的ケアを行っていた。4）ラクイラ大学では、スマイル・プロジェクトという集団心理療法の一種のようなものを展開していた。5）避難所や大学病院には教会のテントが必ず設置されていた。6）イタリア赤十字社のスタッフのベースキャンプではドラえもんの「どこでもドア」のような仕掛けを作り、ベースキャンプに1か月以上詰めているスタッフに対して、ユーモアでストレス解消をするようにしていた。7）スタッフのための心理的デブリーフィング等は公式には行われていないとのことであったが、毎日頻回に行われるミーティングがスタッフのメンタルヘルス維持に貢献しているとのことであった。

「笑い」「ユーモア」をうまく取り入れた心理社会的支援活動が印象的であった。

## Y4-26

# 災害超急性期のこころのケア ～遺族・遺体対応における課題～

神戸赤十字病院　心療内科
○村上（むらかみ）　典子（のりこ）

赤十字の救護活動において「こころのケア」はもはや欠かせないものとなっており、全国の日赤以外の災害医療関係者からも注目されている。しかし、日赤の救護活動が亜急性期の避難所診療を中心に行なわれてきた経緯から、こころのケア研修プログラムも、超急性期（48時間以内）に関しては不十分である点は否めない。ましてや、どうしても救い得ない命があった際の遺族・遺体対応についてはまだ課題が残されていると考える。演者は2005年のJR福知山線脱線事故（以下JR事故）において、負傷者へのこころのケア、遺族へのグリーフケア、災害救援者へのメンタルケアに携わるという貴重な機会を得た。さらに、06年に日本DMORT研究会（DMORT＝Disaster Mortuary Operational Response Team：災害時遺族・遺体対応派遣チーム）を救急医たちと共に設立（代表：兵庫医大地域救急医療学・吉永和正教授）、日赤の枠を越えてネットワークを広げている。これらの経験から、災害超急性期におけるこころのケアについて、以下のように考察した。

(1)　死亡告知と黒タッグ

災害における死亡告知（黒タッグ犠牲者を病院へ搬送しないと告げる、行方不明者の捜索打ち切りを告げるなども含む）は遺族にとってはもちろんのこと、救援者にも大きなストレスである。黒タッグの扱いについてもまだ議論の余地がある。

(2)　災害救援者の惨事ストレス対策

超急性期において救援者が最もストレスを感じるのは、救命を目的に出動したのに死亡確認しかできなかった際や、悲惨な遺体の惨状に直面した時ではないだろうか。すなわち「多くの遺族・遺体に対応する可能性がある」ことへの心の準備が必要である。

今後災害超急性期のこころのケアでは訓練における準備をはじめ「遺族・遺体対応」という視点からの活動が急務であると考える。